

芝浦工業大学 2013年度大学外部評価委員会の総括

2014年5月20日
芝浦工業大学外部評価委員会

1. 経緯と総評

2013年度大学外部評価にあたっては、大学が作成した自己点検・評価書に基づき、5名の外部評価委員が事前に書面評価を行った後、2014年2月20日に、全外部評価委員と村上学長をはじめ副学長、各学部長・研究科長、事務局長等学内関係者が出席する委員会を開催し、学長による総括的な説明や質疑応答を踏まえて最終的な評価を行った。本総括は、同委員会の議事録及び5名の外部評価委員が事前に提出した所見に基づき、評価の結果をとりまとめたものである。

2012年度の評価においては、学長のリーダーシップのもと、チャレンジSIT 90作戦を全学的に展開するなど意欲的な取り組みを行っていることを高く評価する一方で、自己点検・評価書の記載内容に学部・研究科間で精粗があり、全体として重複的な記述が多いこと、男女共同参画が大きな社会的要請であるにも拘らず、学生数や教職員数などに男女内訳が記載されていないことなどを指摘し、一層の改善を求めた。

2013年度においては、自己点検・評価書の記載方法に改善が見られるだけでなく、男女共同参画推進を重点に据えた取り組みが本格化するなど、前年度の評価結果を改革の前進につなげている。委員会の総評において、5名の外部評価委員全員が、高く評価する旨の発言を行ったことがその証左であり、評価を改革・改善につなげながら、PDCAサイクルを確実に回すことで、教育研究のさらなる高度化を実現してほしいと期待するものである。

2. 理念・目的

- (1) 人材育成の目的、その他の教育研究上の目的は適切に設定され、周知、公表も概ね十分なされていると思われる。また、理念、目的に沿った将来の発展方策や戦略を検討し、教育界への進出、大学院進学をエンカレッジし、高等教育における責任を果たそうとしている。
- (2) 科学に裏付けられた工学を社会と世界の諸相を通して学び、その諸問題の解決に貢献する実践型人材の育成にあたるという基本理念に基づき、チャレンジSIT-90作戦を全学的に展開し、学内外にその取り組みを広く公表している。
- (3) チャレンジSIT-90作戦2ndステージの取り組みの柱を、教育の質保証、大学の国際化、人間形成、学生満足度の向上、SITブランド力の向上、イノベーション創出への参画、の6つに置き、なかでもその目標を社会的要請の強い「グローバル化」と「男女共同参画」に絞り、重点的に取り組んだ点は高く評価できる。しかも建学の精神を「社会

（世界）に学び社会（世界）に貢献する技術者（理工学人材）の育成」として読み込み、「グローバル化」に関しては、4月の国際学生寮の建設、9月の国際部発足と実績を重ねてきている。海外交流プログラムも豊富であるが、日本人学生の送り出しプログラムが少ない点は今後の課題である。

- (4) 男女共同参画の推進については、スピーディに体制を構築し数値目標を定め、活動を開始したことは高く評価できる。数値目標を12%とする根拠は何か、今年度から採用予定者の30%を女性研究者にすることで到達する見込みなのか、そうであるならば、採用予定者の30%を女性研究者にするための対策は何か、将来の目標も含め、より具体的な活動内容の明確化が必要。

3. 教育内容・方法・成果

- (1) 教育目標の設定、学位授与方針と教育課程の編成・実施方針の明示は、認証評価での指摘を踏まえた改善を含めて、適切に行われている。教育内容と方法の整備・充実についても学部・学科、研究科・専攻ごとに適切に行われている。
- (2) 教育改革への取り組みが、学部・研究科単位、または学科・専攻単位となり、全学共通科目の開設など全学的な取り組みが具体的にどの程度行われているのかは報告書を読む限り判然としない。個々の教員の授業を積み上げて学科・専攻の教育課程が編成され、それを積み上げて学部・研究科の教育課程が編成されるという、多くの大学に見られる傾向に対して、本学はどのような改革を展開しているのか、例えば、全学レベルで共通化したり実施したりする事項、学部・研究科レベルで共通化したり実施したりする事項、学科・専攻の責任で実施する事項が、統一的な考え方の下に構造されている必要があり、それを明らかにすることを期待したい。また、ルーブリックなど教育のアウトカムを測定する活動を展開しているが、その具体的な内容と成果や課題について明らかにしてほしい。
- (3) 英語教育に関して、工学部、デザイン工学部はTOEICに重点を置いた英語教育、システム理工学部は一步踏み込んで語学教育将来像検討委員会を立ち上げている。「理工英語」という括りが果たしていいことなのか。グローバル化時代の全学的な検討課題のように思われる。
- (4) GPAは、講義の勉学効果を計測するのに役立つが、同じく計測可能性を与えるTOEICやPROGテストの全学導入には、講義とは別の角度から、学生や院生への動機づけや、サポート体制を必要とするのではないだろうか。その点についての考え方を明確にしておく必要がある。
- (5) 学習指導として、工学部は「学習サポート室」を設置し、個別に学生の指導に当たり、システム理工学部は学年担任制、デザイン工学部に関してはそのような教師との接触に関して言及なしとなっている。成績不良の改善・中退者の撲滅のためにも、教師によるケアシステムの確立が急がれる。
- (6) デザイン工学部における、“地球的・歴史的視点で多面的に物事を考える”は現代を

生きる若者を涵養する姿勢として共感をもって高く評価したい

- (7) システム理工学部における将来像検討委員会や将来計画検討ワーキンググループなどの活動が注目できる。大幅なカリキュラム変更が行われている学科があるが、その効用が注目される。総じて、各学部、研究科とも教育の効果、成果向上のための機動的な努力を積み重ねつつあると読み取れる。
- (8) 工学マネジメント研究科における夜間講義のビデオ録画によるオンデマンド配信と土曜面接講義の実態を詳しくは把握していないが、有効な講義体制であると高く評価したい。また、クォーター制の運用の具体となぜ学生の評価が高いのか、教員の間でも評判が良いのかを分析して明らかにしてほしい。

4. 研究活動と研究体制の整備

- (1) 科学研究費補助金の採択状況は、各機関の研究力を評価する有力な指標の一つであり、本学は平成 25 年度において新規＋継続で 87 件、136 百万円を獲得している（JSPS のデータより）。より大型の科研費を獲得することは研究の組織的取り組みが展開されていることを示すものであり、それらを獲得することで研究力の面でのプレゼンスも高まっていくものと考えられる。科研費申請の添削の対応や URA 室の設置を検討していることは高く評価したい。
- (2) 受託・共同研究の獲得平均額を見ると、企業等との共同研究や受託研究はもう少し伸びても良いと思われる。知的財産権確保については、発明届出が少しずつではあるものの増加傾向にあることは好ましく、ライセンス収入も今年度最高を記録している。一方で、外国出願が昨年度 0 件、今年度 2 件であり、グローバルな産学連携をより推進する必要がある。
- (3) 教員組織のダイバーシティという点で、女子教員の採用は進んでいるようだが、外国人教員の採用にも注力してほしい。

5. 学生の受け入れ

- (1) 各学部・研究科ともアドミッションポリシーを明確化し、それに基づいて適切に学生を募集し、公正な入学者選抜を行っている。学力試験による選抜入学学生が 70% を超えており、ツイニングプログラムも実施されている。工学マネジメント研究科を含めて、各部局それぞれ受入れ方針の周知から、選抜、さらにその検証まで堅実にやっていると思われる。
- (2) 優秀な学生を集めるための種々の活動を積極的に展開しており、それらの活動もここ数年の志願者数の増加に繋がっているものと考えられる。その上で、学部については、志願者数の増加が優秀な学生の確保に繋がっているのか（入学学生の基礎学力の平均が上がっているのか）について、プレイスメントテストの結果などを踏まえて、検証されることを期待したい。大学院については、全般に 2 年連続で志願者数が減少する

傾向にあり、報告書においても学部での専門知識の習得が十分でない学生がいるとの記述があり、本学として、大学院修士課程、博士課程のそれぞれをどう位置づけ、如何なる特色を打ち出していくのか、引き続き十分な検討が必要である。

- (3) グローバル化やダイバーシティの推進と国内の優秀な学生を集めることはシナジー効果を発揮すると思われる。国外から多くの優秀な学生を受け入れることにより、活発な国際交流や多様な学生との交流が期待される。また、社会への貢献度の高い大学を誇りに思う質の高い学生を確保できることも期待できる。学力だけではなく、多様な人材との交流や社会に貢献する大学に入りたいと考える学生も「優秀な学生」であると思う。
- (4) 留学生の受け入れについて、日本語授業、日本文化の授業のようなサポートをどのような教員が行っているのか、その体制を含めて明確に示していただきたい。
- (5) 受験生は理系ブームや理系女ブームに乗り順調に伸張している。ハラスメント人権委員会などの組織を含めたさらなる体制整備も必要と思われる。また、女子学生の受け入れをさらに促進すべく、入学辞退者へのアンケート等も含めて、さらなる改善の工夫が施されることを期待したい。
- (6) 障がい学生のサポート体制について、『ガイドブック』刊行のほかは、多様な部署間の連携のもとに学部で行われる個別対応が中心のように思われるが、全学的な組織体制の整備などの方向性を明らかにしてほしい。

6. 学生支援

- (1) 就職支援体制の充実度は、「就職に強い大学」と評されるだけのことはあると思われる。キャリア支援についても、キャリア教育部門が設置され活動が強化された。就職・キャリア支援についてのアンケート調査の満足度も向上している。強いて言えば、キャリアを築く前に、「働く」とはどういうことか、「仕事」とはどういうものかというような根本的な概念を考える機会が少ないのではないかと思われる。
- (2) 同学年に占める中途退学者の占める割合は、注視しなければならないが、一方で再入学への配慮も行われており、大学院等においても就学期間の弾力的延長なども、検証にもとづき改善していく姿勢が読みとれる。理工系大学であるがゆえに、授業に追いつけない学生が一定数生じているものと思われ、それらの学生に対する支援体制も整備されているが、さらなる充実を図り、学生の学力引き上げに引き続き注力し、それを本学の大きな強みにしてほしい。
- (3) 家計所得の伸び悩みから、私立の理工系大学・学部の進学を断念せざるを得ない学生が今後増えることも予想されることから、経済面での支援策の充実に取り組みんでいただきたい。
- (4) 過去に貸与型の奨学金が多かったためか、貸付金残高が突出しているようだが、奨学金は今後、成績に比例、あるいは困窮学生に対する給付型の方向に向かうものと思われる。貸与方式は多くの学生が採用され得るが、一方で未回収問題が顕在化するとい

う問題がある。社会・経済環境なども踏まえつつ、奨学金の在り方についての検討を期待したい。

- (5) 1985年から「学生相談室」が設置され、学生の悩み相談に対応しており、この相談室に救われた学生も多いだろうと推測する。データ集に、退学者・休学者の数の経年推移が出ているが、2011年がどちらの数も増加しているのは何か原因があるのか。2012年度の数字は元に戻っているが何か対策を講じたのか明らかにしてほしい。
- (6) 女性学生・研究者のためのリフレッシュルーム等（JSTのプログラムで謳っている）、アピールポイントを増やし、目標数達成のための方策を練ることが好ましい。
- (7) 学生満足度は着実に向上しており、種々の取り組みの成果が結実しているものと思われる。

7. 内部質保証

- (1) 本評価を含めて、大学評価の体制は整備されており、法人及び大学全体としては適切に機能しているものと思われる。教育プログラムのPDCA化や改革の実行組織の整備など、PDCA化と教育の質を保証する制度を整備し、各部局においても定期的に点検・評価を行い、大学の現況を公表している。これらの取り組みが、教育の質の向上と質の保証に繋がることが究極の狙いであり、具体的な教育内容や方法の改善がどう実現し、それらがアウトカムにどう繋がっているかを検証するシステムの整備に向けて、引き続き取り組みを強化していただきたい。
- (2) 「PDCA化とIR体制による教育の質保証」の組織の配置について言及しているが、組織体制やその運営について、現状と今後の方向を明確にしていきたい。特に、現場で用いられるティーチング・ポートフォリオの管理をどの組織に位置づけるかなども明確にしてほしい。

8. 2013年度評価を終えて

冒頭にも述べた通り、2012年度評価においては、自己点検・評価書の記述内容が学部・研究科によって精粗まちまちであり、重複的な記載も多く、全学的に大変な負荷をかけていただいているにも拘らず、取り組み内容やその成果が評価委員に伝わりにくく、その点を厳しく指摘させていただいた。

2013年度評価においては、企画評価担当の教職員各位の尽力もあり、大きく改善され、大学や各学部・研究科の意図や取り組みが理解でき、男女共同参画に向けて力強く歩を進めていることも確認できた。それらのことについて敬意と感謝の意を表したい。

その上で、昨年度も述べたことであるが、以下の3点を繰り返し強調して、2013年度評価を締めくくりたい。

一つめは、本学が持つポテンシャルや本学が立つポジションを最大限に活かすべく、戦略的な取り組みを継続・強化していただきたいという点である。女子学生の増加、留学生の受け入れと留学派遣の増加、社会人への修学機会のさらなる提供など、本学が果たす

役割は大きく、その役割を果たすことで我が国の高等教育におけるプレゼンスをさらに高めることもできるはずである。

二つめは、グローバル化が急速に進む社会における理工系総合大学の新たな姿を追求し、先頭を切ってその姿を示していただきたいという期待である。例えば、グローバル競争が激化する中で求められる理工系人材とは何か、多様性を尊重し、多様であることを活かす社会や組織で活躍する人材をどう育てるべきか、理工系総合大学としていかなる知を追求すべきかなど、深く考え、大きな構想を示しながら、実現に向けて着実に取り組んでいくべき課題は多い。

三つめは、大学・学部・学科、大学・研究科・専攻など、それぞれの組織とその長の役割や責任を明確にし、大学として大きな方向性や目標を共有しながら、それぞれが自律的にその責務を果たしていく中で、教育研究の高度化が実現できる、そのような仕組みと運営を目指していただきたいということである。そのためには、教員と職員がそれぞれの役割を尊重しながら、適切に分担・協力し、種々の課題に取り組んでいく必要がある。それらが着実に実施され、成果につながっているかを確認するのが、自己点検・評価である。

5人の外部評価委員は全員、客観的な視点からの評価者であると同時に芝浦工業大学の強力な応援団であるとの気持ちで評価にあたっている。既に始まった2014年度がさらなる飛躍の年となることを心より祈念したい。

以 上